

蟹と水仙の文学コンクール 入賞者 大賞作品

俳句部門（小学生の部）

大賞

清水南小学校 六年 堀部 航平

「水仙花 部屋に香水
まいたよな」

奨励賞

萩野小学校 二年 小 塙 茜
鷹巣小学校 四年 笹原 朋子

佳作

京都市立大塚小学校 六年 小 多 翔 士
織田小学校 二年 川 端 礼 美
城崎小学校 三年 中 橋 佑 太
四ヶ浦小学校 三年 中 野 心 惇
城崎小学校 五年 倉 谷 勇 人

俳句部門（中学生の部）

大賞

鯖江中学校 三年 佐々木 郁 哉

「水仙を たばね続ける
祖父のせな」

奨励賞

武生第三中学校 一年 山 口 梨 絵
武生第一中学校 二年 佐々木 真 紘

佳作

川越市立福原中学校 二年 永 田 萌
川越市立福原中学校 二年 森 田 陽 彦
朝日中学校 一年 三 好 麻 衣
福岡市立当仁中学校 二年 今 村 幸 輝
朝日中学校 二年 五 島 大 樹

俳句部門（高校生の部）

大賞

大阪府関西大倉高等学校 二年 昌 原 杏 子

「ずわい蟹 送る父待つ
赴任地へ」

奨励賞

仁愛女子高等学校 三年 多 田 真 弓
仁愛女子高等学校 三年 高 橋 直 佳

佳作

仁愛女子高等学校 三年 白 崎 つばさ
仁愛女子高等学校 二年 斎 藤 真 由 香
丹生高等学校 一年 青 柳 早 織
丹生高等学校 二年 小 林 葉 月
丹生高等学校 二年 上 坂 武 士



俳句部門（一般の部）

大賞

福井県敦賀市 坂 下 哲

「花言葉 添へて水仙
届きけり」

奨励賞

愛知県名古屋市長 小 沢 芳 治
岐阜県大垣市 大 井 公 夫

佳作

石川県輪島市 中 津 正 克
福井県坂井市 五十 風 道 夫
東京都練馬区 浅 見 三 郎
福井県越前市 蓑 輪 すゞ子
神奈川県横浜市 竹 澤 聡

詩部門（小学生の部）

大賞

四ヶ浦小学校 三年 富 田 光 星

「水せんと音楽」
ぼくがスキップ
きみがちよつとゆれる
風がきみに合わせて
やさしくふいたよ

ぼくが高くスキップ

きみはうれしそうに
友達にもよびかけたよ

風がリズムをとって
ぼくのほほに
話しかけてきたよ

ぼくが歌いながらスキップ
きみと風が
いつしよに合わせて
ぼくに
たくさん音ぶをはこんでくれたよ
二人で音楽の時間だね
今度はどんな曲にしようかな

奨励賞

朝日小学校 四年 倉 内 心 愛
四ヶ浦小学校 三年 堀 竜 矢

佳作

東京都百舌園小学校 三年 安 藤 円 樺
織田小学校 五年 森 崎 智 哉
東京都百舌園小学校 五年 安 藤 瑞 希
四ヶ浦小学校 五年 嘉 奈 宏 造
織田小学校 六年 上 坂 唯 香

詩部門（中学生の部）

大賞

越前中学校 三年 中 野 斗 夢

「戦場の父」
一月六日 夜

日本海は戦場と化した
良い漁場を狙おうと船ははしった
午前一二時、船のあかりを
こうこうともし、全速力で船をとばす
明け方 父の船は漁場についた
さっそく海へと網がうたれた
何十分後に網は上がってきた
みんな思った
「頼む、大漁であつてくれ」
父と乗りくみ員は満面の笑みを浮かべた
その瞳には赤々としたかにかうつついた
大漁だ
しかし全せきがそうではない
少ししかとれない船もある
昼ごろ父の船は帰港する
赤々と輝くかにはまだ生きている
そしてかには陸へとあげられた
父はまた戦場へと向かった

そのころ町は白煙がたちこめていた
かにをゆでていた
ゆだつたかにはいちだんと赤々していた
町人はみんな笑顔だ
すぐに人を笑顔にする父を見てはくは
とてもほこらしかった

奨励賞

越前中学校 三年 藤 沢 佑 大
越前中学校 三年 岩 崎 未 歩

佳作

越前中学校 三年 吉 田 秀 矢
武生第三中学校 一年 山 口 梨 絵
織田中学校 一年 笠 原 菜 々 子
越前中学校 二年 久 保 涼 海
越前中学校 三年 平 田 亘 輝

詩部門（高校生の部）

大賞

仁愛女子高等学校 一年 酒 井 美 帆

「独り」
波の音 花のかおり
誘われるように
導かれるように 進むと
風が広がる場所にいた
一面の水仙が
うなづき合うように
風にゆれていた
爽し気にゆれている水仙たちの中
独り 空を見つめる水仙が
咲いていた
顔を上げたまま
強い風にも負けずに
戦う女神のように
私も同じように空を見つめた
すると 自分の中の
弱々しい くよくよとした
情けない感情の塊が

詩部門（一般の部）

大賞

福井県越前市 神 坂 信

「箱膳とせいこ蟹」
水屋の戸棚を開けると
柿渋を塗り重ね
幾年も使い込まれて
漆のような光沢を放つ
亡き祖父の箱膳が
家長としての誇りのように
今も、置かれてある

「お呼ばれ」があると
自ら轆轤で引いた
揃いの腕の入った箱膳を
風呂敷に包み
紋付羽織の背筋の伸びた祖父の

出掛ける後姿を
今も蘇る

少し酔った足取りで
風呂敷の箱膳からはみ出した
せいこ蟹の足を
ぶらぶらと揺らしながら
帰って来る祖父を
囲爐裏の糟火明りの中で
わくわくしながら待った

「食べ終わったら蟹殻は
灰甕に蓄え
肥やしにしろよ」
祖父の声が炉煙の向うから
聞えそうだ

水屋の戸棚を開けると
箱膳が、今も家長のように
祖父の後姿が
そこにある



奨励賞

静岡県富士宮市 中 島 真 悠 子
大阪府豊中市 大 西 久 代
福井県坂井市 半 田 信 和

佳作

福井県福井市 木 内 利 栄
滋賀県竜王町 松 浦 弘 美
奈良県香芝市 林 俊 雄
京都府京都市 森 悠 紀
京都府京都市 山 本 和 美